

# 日本技術士会 中部本部 岐阜県支部

## 令和3年5月講演会メモ

日時：令和3年5月15日（土） 13:00～17:00

場所：ワークプラザ岐阜3階大会議室 および Zoom システムによるウェブ講演会  
（会場とウェブ併用の方式は、今回が初めて）

後援：岐阜大学工学部、岐阜工業高等専門学校

ウェブ参加者：会場参加18名、講師2名、事務局1名； ウェブ参加11名 総計32名

司会：高木 智（建設・総技監工）

メモ作成：田島 暎久（航空・宇宙）

### 1. 来賓講演

**演題**：「反社会的勢力に関するリスクと企業（個人）としての対応」

**講師**：元・愛知県警警視捜査第四課上席管理官 丹羽 幸彦 氏

**講師紹介**：現職時に山口組分裂後の山口組総本部の捜査責任者等に携わり、退官後も警察庁中部管区警察局特別教授として主に中部管区警察学校で中堅係長等を対象にした専科教養の講師を務めて捜査技能の伝承及び若手捜査員の育成に携わっている。その経験から反社会的勢力に関する数多くの事例談および企業として個人としてどのように対応すべきかなどの講演を各地で行っている。

**講演概要**：企業等へのコンサルティングを実施する上で、また、建設現場等の事務所を運営する上で、反社会的勢力が好まざるに関わらず接近してくる可能性があります。そのような場合の対処方法や断り方等について、我々技術者も知っておく必要があると思います。

**講演内容**：

講師の意向によりメモは割愛いたします。



コロナ感染対策の会場：入場時に検温と消毒、マスクを着けて、密を避けて座り、窓を開けて換気、講師に透明カーテンの仕切り

## 2. 来賓講演

演題：「ハワイ雑学」

講師：愛知淑徳学園 学園長・理事長 小林 素文 氏

講師紹介：1945年生れ。1968年 慶應義塾大学 経済学部卒業。1971年 米アイオワ州立大学院 言語学専攻修士課程。1972年 愛知淑徳高校 教諭・愛知淑徳短期大学 講師。1984年 愛知淑徳大学 教授。1989年 愛知淑徳大学 学長（～2011年3月）。1991年 愛知淑徳学園 理事長（～現在）。1996年 愛知淑徳学園 学園長（～現在）。

専門分野：社会言語学、学校経営

著書：「様々な英語 — 母語として民族語として」1988年 研究社出版、「複合民族社会と言語問題」1989年 大修館書店、「ハワイ物語」2013年 東京図書出版、「カメハメハ大王 今へとつながる英傑の軌跡」2019年 風媒社

講演概要：①ハワイ諸島は日本に近づいている？②ハワイ語はハワイの公用語？③日系人がハワイ全人口の4割を占めていた？④You aikane better no こんな言葉が使われていた？4つの問いの答えは全てイエス。こんなハワイの様々な側面について紹介いたします。



講演内容：

### 先史時代1 ～ハワイの島々の成り立ち～

- 地球内部のマントルが噴き出すホットスポットによって火山島が生成され、それが太平洋プレートに乗って移動し、また新しい火山島がホットスポットで生成されるという繰り返しの結果、現在のハワイ諸島が誕生した。ハワイ諸島は西のミッドウェイ島から東のハワイ島まで含む一連の島々からなり、最も新しいハワイ島は40万年前に誕生して現在も活発な火山活動で成長中だ。ハワイ4島で最も古いカウワイ島は500万年前にホットスポットで誕生して今の位置に移動した。ハワイ島にはロイヒという海底火山があり、これが何十万年後には新しい島になる。ハワイ諸島は太平洋プレートの動きとともに年6cm程度、日本に近づいているのだ。
- ハワイでは常に北東からの貿易風が吹いているので、からっとして涼しくてさわやか。貿易風が北東の山の斜面に当たって大量の雨を降らすため地下水が豊富。反対側の山の斜面は雨が降らないため観光地ができる。溶岩台地で地下水が豊富にあるのでゴルフ場は人工的にいくらでも作れる。このようにハワイは観光地として素晴らしい自然環境なのだ。
- 主要4島で最も新しいハワイ島は、マウナケア、マウナロアという4000m級の高山や噴火を繰り返すキラウエア火山など活性豊かで、溶岩台地のゴルフ場はリピーターが多い。最も古いカウアイ島は50年以上前、学生時代に4か月間パイアヤ農園で働いたが、その時に見惚れたワイメア峡谷が5年程まえに訪れた時には峡谷がかなり崩壊し浸食が進行していた。このようにハワイはそれぞれの島に異なった趣があり、それも魅力なのだ。

### 先史時代2 ～航海冒険者・希望の島そして階級社会へ～

- アフリカで誕生して世界各地へ拡散していった現生人類は、2000～3000年前にタヒチ島に到達して、そこから1400年前にハワイ諸島、1000年前にニュージーランド、1500年前にイースター島に渡った。ハワイは人類の世界拡散のほぼ最後になる。
- 星を頼りにダブルカヌーでハワイ諸島に渡ってきたポリネシア系の人々は、飢饉や戦争で元の島を脱出せざるを得ない難民だ。多分、ヤシの実が辿り着くほどの確率で、運のある者達だけが到達したのだろう。居住目的の10人ほどの男と少数の女がタロイモ、ココナツ、バナナなどの種と、犬、豚、鶏を積んでたどりついたハワイは、雨が多く植物が育ち易く、鶏や豚は放し飼いでいくらでも増えた。人々は主食のタロイモ畑を作り、ヤシやバナナも植えた。人口が増えるとともに、各々の島が村と地域に分かれていった。
- 西暦1200年頃には王や地方首長など一握りの特権階級と大多数の平民で構成される階級社会ができた。同時に階級社会の秩序を保つ制度として多くのカプ（おきて）が定められた。例えば、首長の領分を侵さないように決められたカプとして、「平民は首長の影を踏んではならない」「平民は首長が通る時に土下座しなくてはならない」などがあった。女性のマナ（神聖な力）を恐れ、守るために「女性は男性

と食事をしてはならない」「女性は豚やバナナを食べてはならない」「女性は神殿に入ってはいけない」などのカプを定めて、男性と女性の役割分担を明確にした。自然のマナを守るために「サバは1月から6月まで獲ってはならない」「カツオは7月から12月まで獲ってはならない」などのカプもあった。

- 18世紀後半に西洋人がハワイを発見するまで石器時代の生活が続いていた。厳しいカプで守られた階級社会において、上の方では王をめぐる争いが絶えなかったが、人口の大多数を占める下の方では人々が助け合い、分かち合いを行っていた。「オハナ」はハワイでは誰でも知っているハワイ語で家族を意味する。タロイモの枝でイモの家族が増えていくように家族を大切に、困ったときはお互いに助け合う。例えば、親をなくした子供を引き受けて面倒を見るなどの見返りを求めず助け合う心がアロハスピリッツであり、その源泉はオハナだ。
- 無文字社会で伝説を伝えるために、激しいテンポのメレ（詠唱）とフラ（踊り）がある。アロハスピリッツ、フラ、メレといった先住民の伝統文化や精神が残っているのはアメリカ50州の中でハワイ州のみだが、それはハワイ王国が100年近く続いたおかげだ。
- アロハ、オハナ、アロハスピリッツは今でも生きている。各州ごとに州憲法があるアメリカで、ハワイ州はアロハスピリッツが憲法に明文化されアロハ州と呼ばれている。

### 西欧文明との遭遇 ～キャプテン・クックの到来～

- 北極海を抜けて太平洋と大西洋をつなぐ北西航路を探索しようと太平洋を北上していたイギリス海軍のキャプテン・クックが1778年にハワイ諸島を発見した。丁度、ハワイ4島に王が存在して全島支配の覇権争いをしてきた戦国時代で、鉄を多く持っていたキャプテン・クックの船は宝船に見えた。漂着した難破船からもたらされた鉄の威力をハワイ人は既に知っていたのだ。クックはカウアイ島ワイメアに上陸して大歓迎を受けた。クックの情報と武器を手中にした者が全島支配できるからだ。その後、クックは北極海へ航海して1779年に再びハワイ島へ戻ってきた時にハワイ人に殺された。
- 「クックがハワイ島に戻って来た時、白い帆を高く掲げて神の道を通って来たため、ロノ（豊饒の神）の化身と思われて大歓迎を受けたが、たくさんの献上品をもらい出航した直後に帆が壊れて戻ってきたためにロノではない（神は翌年にしかもどってこないから）となって殺された」という人類学者の説が最近まで通説になっていた。が、ハワイの人たちはそんな単純ではない。覇権争いの中「クックを味方にしよう」と大歓迎をし貢物をたっぷり与えて送り出したのにすぐに戻ってきた。大歓迎は無理だ、それなの冷たく扱われたことに怒ったクックが王を人質にしようとは許されない」と殺したのだ。

### 島々の統一 ～カメハメハ大王～

- キャプテン・クックがハワイを発見して6年経った頃から、毛皮貿易の中継地点としてハワイに寄港する西洋の貿易船が急激に増えた。北アメリカからはラッコ・アザラシ・ビーバーなどの毛皮、中国からは東洋の物資が交易された。ハワイでは、鉄・鉄くず・武器と食料・燃料・水・塩などが物々交換された。丁度、この頃1783年にアメリカは独立してハワイと密接な関係を築いていった。
- ハワイ4島の王が覇権争いをしてきた戦国時代を制して統一したのはハワイ島のカメハメハ王だが、初期はマウイ島のカヘキリ王が統一する寸前までいっていた。ハワイ島では王が亡くなって嫡男のキワラオが後継の王になった。カメハメハは亡くなった王の甥であったが、キワラオ王とその弟のケオーウアを殺した。取り巻きの首長達は自分達の損得勘定からカメハメハに味方した。ハワイは血筋が大事にするため、カメハメハは自ら殺したキワラオ王の娘と結婚して「私は正当な王だ」と宣言した。
- ハワイ島カメハメハ王とカウアイ島カウムアライ王の戦いは、さすが賢明な王同士、勝敗を決するまで徹底的に戦わないで、ある程度戦っては止めるという繰り返しだった。両者とも西洋人から武器や情報を得るとともに西洋人を雇って戦っていた。カメハメハが全島の王になれたのは、闘いで勝ったのではなく運だ。高齢なカヘキリが病死したのだ。
- カヘキリ王が亡くなった混乱に乗じてカメハメハがマウイ島を制圧し、ヌアヌパリの戦いでオハフ島も制圧したのは1795年。ハワイ諸島最強の王となったが、若くて西洋人からも信望の高いカウアイ島の王カウムアライとの決着をつけることができないまま、1810年にカウアイ島に自治権を与えることでカウムアライと合意して実質的にハワイを統一した。このような経緯からカメハメハ王朝の始まりは1795年とも1810年とも言われる。
- カヘキリ、カメハメハ、カウムアライの明暗を分けたのは何か。カヘキリは早く生まれ過ぎ、カウムアライは遅く生まれ過ぎ、ちょうど良い時に生まれたのがカメハメハ。運が英雄を決めたのだ

## カメハメハ王朝1 ～大王とその妻カアフマヌ～

- カメハメハ王朝は中央集権体制を確立。西洋船から二人の西洋人を拉致して様々な情報を得るとともに軍事顧問にして軍隊を西洋的に訓練させた。二人は逃げるチャンスがいくらでもあったが、最後までカメハメハを支えて、各々、オアフ島とハワイ島の統治を任せられた。二人ともハワイ人と結婚してその子孫も王朝を支えていったのは、やはりカメハメハが魅力ある人物だったのだろう。
- 全てのカプを西洋人に強いることはできないので、「個人の安心安全を犯してはならない」というカプだけを西洋人に守らせて治安を維持した。このカプは今もハワイ州憲法に生きている。
- 当初は毛皮貿易が経済の中心だったが、その後、香木として中国で高価な白檀（サンダルウッド）がハワイにたくさん自生していることが分かって、白檀貿易が中心になった。30年余り続いた白檀貿易のおかげでハワイは非常に豊かになり、王をはじめ上層階級はヨットや西洋の品々を購入して贅沢三昧の暮らしをするとともに急激に西洋化していった。
- 1819年にカメハメハ大王が死去すると、正妻との間にもうけた二人の王子が各々2世、3世として王朝を継承いく。カメハメハ2世は未だ子供だったために養母のカアフマヌが「大王の意思として長男の親王と私が国を治める」と宣誓して摂政になった。女性のカアフマヌは神殿で行う政治の場に参加できなかったため神殿をすべて破壊し、カプなど旧来の秩序も全て打ち壊したが、一番の理由は反乱を起こしそうな大王の甥を追い落とすためだった。それにしても、カプなど旧来のシステムを全て打ち壊したために大混乱になる恐れがあったが、このタイミングでハワイを一変させる船がやって来た。
- 1820年、ボストンから南米のホーン岬を廻ってキリスト教の宣教団がハワイに来た。前年の大王が亡くなる年には捕鯨船もやって来た。1816年のホノルルを描いた絵には多くの船が停泊している様子が描かれており、既にハワイが一大港町になっていたことが分かる。キリスト教の布教とともに、打ち壊されたカプに代わってキリスト教の戒律が規範になった。カプに代わる規範として、例えば、「殺人・盗み・姦淫・売春・ギャンブル・酒の販売の禁止」と当初は規定されていたものが、「殺人・盗み・姦淫の禁止」だけに変更され、売春・ギャンブル・酒の販売は認められた。ボストンから来た捕鯨船の船員たちが大反対したためだった。
- 宣教師は布教活動のためにハワイ語の文字を作り、英語化しなかった。ハワイ語の文字はハワイ人の教養・文化を深めるのに貢献した。
- 豊かさの源だったサンダルウッドが乱獲によって1830年頃に枯渇するとともに財政悪化が起こった。更に、はしか、天然痘、梅毒、淋病など西洋人によって持ち込まれた伝染病が免疫のないハワイ人に蔓延して人口減が進んだ。カメハメハ2世と3世の摂政を務めてきたカアフマヌが1832年に亡くなった。

## カメハメハ王朝2 ～立憲君主国家の確立～

- 1819年にボストンから捕鯨船団が来た当時、鯨の油はランプの燃料として貴重な資源だった。大西洋でとれなくなった、地中海もとれなくなった、だから南太平洋から北太平洋へと鯨を求めてやってきた。1853年にペリーが浦賀にやってきたのは捕鯨船へのマキや食料の補給基地の目的もあった。捕鯨の目的は鯨油とヒゲ骨だけで残りの肉や内臓は捨てていた。鯨の皮下脂肪から鯨油を抽出するために船上で大量のマキを燃やしていた。1840年頃から1870年頃にかけてマウイ島のラハイナやオアフ島のホノルルなどが捕鯨船団の基地となってハワイは捕鯨基地経済で発展した。現在、ラハイナには鯨博物館がある。
- しかし、乱獲によって鯨が少なくなり北極海まで行かないと鯨が捕れなくなって難破事故も頻繁に起こった。また、鯨油に代わって石油が使われるようになって捕鯨の価値がなくなってきた。1870年にはスタンダード石油が創設されて石油時代の幕開けとなり、捕鯨船団の時代は終焉を迎えた。
- 捕鯨が最盛期を迎えた1850年前後には、多くの西洋人が入ってきて会社もできた。ハワイ人も自給自足の村から都市へ流れて都市人口が急増した。もはや従来の制度が通用しなくなり近代的な立憲君主国家への移行が促された。また、ハワイの経済価値が高くなるのに伴って、タヒチを手中にしたフランスがハワイも取ろうと動き出した。
- 1840年に憲法を制定して近代的な立憲君主国家になり、議会もできた。憲法の草案作りには優秀なハワイ人も加わった。列強に対する不平等条約もハワイ人が交渉して改正し、独立国家として歩き始めた。米国や英国などに続いて日本とも修好条約を1871年に締結。すべて王のものだった土地の所有権を整備したり教育の充実を図った。特に教育制度ではパブリックスクールによって世界有数の識字率になっ

た。1840年代にほとんどの人が読み書きできる国は他になかった。当時の日本の江戸時代よりも識字率が高かったのだ。

- 王は「ハワイアンによるハワイアンによるハワイアンによる」を夢見たが、深刻な人口減に見舞われて夢に終わる。キャプテン・クックが来た時に30万人いた人口が、王国の滅亡時には僅か4万人に激減していた。もし、日本の人口が明治維新時の3000万人から1億人に増えていったように、30万人が100万人に増えていたら、きっと立派な王国になっていたのではないか。歴史に「もし」はないが、人口減少が最大の問題となってハワイ王国の運命を決めた。

### カメハメハ王朝3 ～カメハメハ王朝の終焉～

- 捕鯨基地経済の下で1850年代のホノルルはサンフランシスコと同規模の大きな港湾都市だったが、捕鯨は1870年代から急激に衰退していった。捕鯨基地がなくなるのと、サトウキビのプランテーション経済がハワイを支えるようになった。プランテーションには様々な国から労働者が来た。日本からも来た。アメリカでは1869年にシカゴ・サンフランシスコ間に鉄道が開通して、ハワイの砂糖はアメリカ国内の消費地に大量に出荷できるようになった。
- 生涯独身であったカメハメハ5世は、大王のひ孫のバニース・パウアヒ王女を後継に指名しようとしたが断られ、5代続いたカメハメハ王朝は終焉を迎えた。バニース・パウアヒ王女はカメハメハ王朝の全財産を相続し、カメハメハスクールやビショップ・パウアヒ・ミュージアムの設立などに尽力した。カメハメハスクールは全米で最も裕福な私立の小中高等学校として今も存在する。

### ハワイ王国の繁栄と滅亡 ～カラカウア王とリリウオカラニ女王～

- 王族の中から議会選挙によってルナリロが第6代の王に選出されたが、1年で亡くなった。その後継となった第7代の王が有名なカラカウア王。カラカウア王は米国と互惠条約を締結して、ハワイ産砂糖の関税をなくして競合相手だったキューバ産砂糖を押し退けた。この条約は、米国にとってもアジアの権益を狙う軍事拠点としてハワイを掌中に収めるために重要であった。
- カラカウア王は、陽気な王様「メリーモナーク」として人々から慕われたが派手好きだった。アメリカで唯一の宮殿と言われるイオラニ宮殿やカメハメハ大王像を建立したり、宣教師によって禁じられていたフラやメレを完全復活した。9ヵ月かけて世界1周した時には、日本にも寄って皇室の親王とハワイ王女との結婚を申し込んだが実現しなかった。このハワイ王女とはカイウラニ王女で、ハワイ王国最後の王になったリリウオカラニ女王の姪。写真のような絶世の美人である。
- 米国人の政商プレックルズやモルモン教徒のギブソンなどカラカウア王に巧みに取り入った外国人が重用されたことに、ハワイで生まれ育った白人のハオレ達は快く思わなかった。王とハオレ達との確執が王と議会との争いに発展して、「銃剣憲法」と呼ばれる新憲法を王に強制的に認めさせて、王の権力を制限した。1887年、米国との互惠条約を更新して米国に真珠湾の独占使用権を与え、ハワイの米国依存が強くなっていった。1891年、カラカウア王は在位17年で亡くなった。
- カラカウア王の指名によってリリウオカラニ女王が第8代の王として即位した。この王の時に米国でマッキンリー関税法が施行された。それは、米国の工業製品を中南米の国に輸出するために、中南米から輸入する農産物の関税をなくす法だ。これによってキューバ産砂糖の関税がなくなり、ハワイはキューバ産砂糖との競争で勝てなくなった。米国内の競争相手であるルイジアナ州もキューバに勝てなくなったが、こちらには補助金が出された。ハワイの砂糖産業は不況に陥ってしまい、議会は何も対策が打ち出せないまま紛糾した。
- 1893年、紛糾をなくすためリリウオカラニ女王は王権強化を目論んで新憲法を制定しようとしたが、ハオレ勢力が反対して抗議の大集会を開いたために市内は騒然となった。この機に乗じて、ホノルル在住の米国市民の安全確保を名目に米国公使スティーブンは米国軍艦の兵士の上陸を要請し、イオラニ宮殿の近くに兵士が配置された。これを見たりリウオカラニ女王は退位を表明せざるをえず、8代続いたハワイ王国が崩壊した。これは自国の軍隊を使ってアメリカが加担したクーデターであり、明白な国際法違反であった。百年後にクリントン大統領がその非を認めて謝罪した。女王が残した「リリウオカラニ財団」は広大な不動産など莫大な財産を活用して現在も貧しい人々を支援している。誰でも知っている「アオハオエ」の歌は女王が作詞作曲した。
- ハワイ王国は、1795年から1893年まで百年弱にわたって8代の王が治めた。クックが来航時のハワイは石器時代だったが、その後、中央集権の絶対王政を経て近代的立憲君主国家になった。無文字社会か



ら教育制度が確立して世界有数の高い識字率になり優秀なハワイ人が多数輩出された。経済面では、毛皮貿易の中継基地から白檀貿易、捕鯨船基地を経て砂糖プランテーションへ移った。1788年クック来航時に24~40万人だったハワイの人口は、1853年には7万人に減少したがハワイ人の構成比率は97%であった。1900年には更に減少して4万人になり、移民が増えたためにハワイ人の構成比率も26%に下がった。

- ハワイ王国崩壊の最も大きな要因はハワイ人の人口減少と構成比率の低下。それに王とハオレの主導権争い。国防や治安維持は英米仏のバランスパワーではなく、米国への一国依存。経済も米国市場を当てにした砂糖プランテーションだけで、これも米国への一国依存。従って米国の準州に向かうことは必然の流れであった。
- ハオレ勢力はハワイが米国にアネックス（併合）することが不況脱出への唯一の道と考えた。ハワイが米国の準州になればレイジアナ州と同様の補助金によってキューバ産砂糖と競争できることになる。他方、米国にとってハワイはアジア侵攻の拠点として魅力的だった。このような理由から米国とのアネックスが模索された。ところが、アメリカ政権が共和党から民主党に代わってマッキンレー法が廃止されるとともに状況が一変して元に戻った。

### ハワイ共和国 そして 米国の準州に

- 米国は帝国主義的拡張に反対する民主党のクリーブランド大統領に替わった。リリウオカラニ女王と姪のカイウラニ王女がニューヨークに出向いて、「クーデターは不当なやり方だ」と訴え、これに新聞が同調した。真相究明のために設置されたブランド調査団は、「米国とハワイに相互の独立を認める条約があるにもかかわらず米国領事がクーデターに加担したのは間違い」と結論付けた。女王と王女は王国の復活を米国政府に訴えたが、さすがにそれは拒否された。当時の風刺画には、アンクルサム（米国の市民代表）が大統領に向かって「お前さん何をいっているのか、この女王を復権させるなどと馬鹿なことを言うべきでない」という様子が描かれている。このような事情があって暫定政府はアネックス交渉を一時的に断念し、独立国家をつくることとした
- 1894年7月にハワイ共和国が樹立された。ハオレ2世のサンフォード・ドールが初代大統領に選出された。有名なパイナップル会社のドールは彼の甥が創設。マッキンゼー法が廃止されてハワイは不況を脱したが、米国大統領の政策次第でハワイが振り回されることを避けるためには米国の一員になる以外に道はない、との考え方がハワイ共和国の共通認識になった。丁度、その時に、スペイン領キューバの独立をめぐる米西戦争が起こった。キューバ在住の米国市民の安全確保を名目に覇権された戦艦メーン号の謎の爆破がおこり、それをスペイン政府の責任にして独立運動支援の米西戦争をおこした。本当の目的はキューバ独立ではなく、スペイン領フィリピンを手中に収めて帝国主義戦争に名乗りを上げることだった。フィリピンで戦争になればハワイは重要な軍事拠点となるためアネックス交渉がすんなりと決まって、1898年にハワイは米国の準州になった。米西戦争で米国が勝利した結果、フィリピンはアメリカ領となり、キューバは独立した。
- 米国の準州になるとともにハワイ共和国の国民は米国市民になり、米国の法律が適用されることになった。ただし、州知事は大統領が任命し、米国連邦議会のハワイ代表は発言権はあっても投票権がなかった。このこと以外は他州と同じ扱いになった。準州は州になる前段階であり、まずは準州になって相互に認めた上で州に昇格する。単なる植民地のグアムやフィリピンとは根本的に異なる。

### 多民族のスイート・プランテーション

- ハワイは宣教師が来て乗っ取った、と言われるのがそうばかりではない。良好な港町に魅了されて人々が集まって来た。その中にいた数人の商人が砂糖会社の主要5社、ビッグ・ファイブを興して大規模経営を行い、ハワイの政治経済を支配したのだ。ジェイムス・ドールが興したパイナップル会社はビッグ・ファイブに次ぐ位置にあった。
- 砂糖会社のスイート・プランテーションは各国から来た移民労働者に支えられた。最初は中国からの移民だった。米国準州になると米国の移民排斥法が適用されて中国人は来ることができなくなったが、代わりに大西洋のマデラ島やアデラス諸島からポルトガル人が次々に来た。それらの島々でワイン用のブドウが不作になったためだった。持ち込まれたポルトガルの文化はウクレレやマラサダとして今に繋がっている。

- 日本からは、中浜万次郎など漂流民が最初で、その後の「元年者」は明治元年の混乱に紛れて渡航してきた153人。1885年の官約移民から多くの日本人がやって来た。何故、日本が官約移民（国との国との取り決めによる移民）に選ばれたのか。清（中国）は混乱していて交渉できる国ではなかった。ポルトガルは地理的に遠過ぎた。東南アジアの、フィリピンはスペイン領、インドネシアはオランダ領、ベトナムはフランス領だった。朝鮮国は開化派と鎖国派が対立した混乱状態で交渉できる状況ではなかった。従ってアジアで正常に交渉できる国は日本のみであったのだ。  
日本移民史などには、「元年者」が勤勉だったおかげで、さすが日本人だと賛美されて日本に声がかかった、と書かれているが、貧しい人は皆、勤勉で一生懸命働くので、特に日本人が勤勉だからということとは言えない。当時の状況が日本官約移民をもたらしたのだ。  
当時、日本の農村は非常に貧しかったため、人々はどっとハワイ行きを申し込んだ。日本の10倍の給料がもらえて、しかも3年契約で錦衣帰郷できる、という振れ込みに引かれて申し込みが殺到した。しかし、実際にハワイに行ってみると物価の違いから思ったようにはならなかった。その後、私約移民、自由移民、呼び寄せ移民となって、日本の移民が増えていった。日本人・日系人の人口比率を見ると、1884年は元年者だけの0.1%、官約移民が始まった1890年に14%、1900年に40%、1910年に42%、1920年には43%に達して最高値になった。
- 日本人が増えて、人口の40%を占めるようになるとハワイはさながら日本国ハワイ県のような感じになった。当時のハワイの写真を見ると本当に面白い。あちこちに日本人街ができて、日本人学校、映画館、賭博場まであった。日本人の増加に対して反日ムードが起こったため、1908年に日米紳士協定が締結されて日本からの渡航者は家族呼び寄せと再渡航者だけに制限された。この時に、日本で結婚したことにして配偶者を呼び寄せる写真結婚が流行った。ハワイの英字新聞は、「写真結婚は非人道的」と批判した。実際に写真結婚した人に聞いてみたところ、「国のじいさんやばあさんがいいといっているの、それでよかった」とのこと。当時は日本にいても同じような状況なので、非人道的などの非難はあたらぬ。
- 錦衣帰郷が果たせず家族で暮らす人が増えて、1920年には日本人（一世）が55%、日系アメリカ人（二世）が45%になった。日本人一世を含むアジア系には米国民になる帰化権がなく、二世は日系アメリカ人として永住した。（米国で生まれた者は両親の国籍に関係なく米国民になれる。）
- 1924年の新移民法（排日移民法）によって日本からの移民は一切認められなくなった。いつか日本に帰国しようと思っていた人たちは、日本に帰っても生活の保障がないし、帰国すれば再入国できないため永住土着の気持ちが強くなった。新しく日本から来る人がいなくなって、1924年頃に半々だった一世と二世の割合が、1940年頃には二世がほとんどを占めるようになった。その頃に真珠湾攻撃が起こって太平洋戦争が始まった。
- 1924年からアジア系の移民は全く来れなくなったが、米国の植民地だったフィリピンだけは例外扱いだったので、フィリピンから多くの移民がやって来た。当時、日本人労働者による大規模なストライキが起こったため、日本人を「分けて管理する(Divide & Control)」方針を資本家側が打ち出して、フィリピンの移民を受け入れたのだ。
- 日本人一世はフィリピン系移民に対して「フィリピーノ」と呼んで、「あいつらは南方系なので女に手が早い。日本の女を取っていってしまう」と悪く言っていた。しかし、フィリピンから来た移民の95%は若い男性だった。フィリピンでは日本のように写真結婚や嫁を送ってきてくれる習慣がなかったため自分で結婚相手を見つけねばならなかった。ハワイで最も多いのが日本人女性だったことを考えると、致し方なかったのではないか。貧しい暮らしだったフィリピン人はよく働いて家族のために仕送りした。
- ハワイは複合民族社会である。プランテーションに移民労働者が入ってきて定住した結果、多民族・多文化・多言語の社会が生まれた。1900年頃のハワイは日本系が大部分を占め、特権階級のハオレ系は5%ほどだった。1930年頃になるとフィリピン系が増えて17%を占めた。ハオレ系は多くの軍人が来るようになって増えた。戦後ハワイへは白人たち多く移住してきたが、今でもハワイは白人が過半数を占めていない唯一の州である。民族間の混血が進んだ州でもあり、例えば8分の1だけ日本人という人も多い。
- ハワイには多民族の文化が混合した独特の雰囲気がある。マラサダ、スパムおにぎりなどの食文化、ウクレレ、マラカスなどの楽器、ボンダンス（盆踊り）、中華街、孫文の像まである。スイートプランテー

ションは少しだけ今も残っている。ドールのパイナップル畑はオアフ島に地産地消のためだけに少し残り、サトウキビ畑もマウイ島に1箇所だけ残って、他はすべてなくなった。

#### リメンバー・パールハーバー そして 50番めの州へ

- 1941年12月7日（ハワイ時間）早朝、日本による真珠湾攻撃が勃発した。青天の霹靂だった。同日午後4時、数十名の日本人一世が逮捕された。その後700人ほどの日本人一世が本土の強制収容所へ送られた。1942年、日系人の第100大隊を結成。1943年、日系人から志願兵を募集して442部隊を結成、1944年、第100大隊を傘下にした422部隊が欧州戦線でテキサス部隊を救出して軍功を上げた。本土の日系人は全て強制収容所に送られたが、ハワイでは700人だけだった。ハワイの日系人を全員送り込んだらハワイの経済は成り立たなくなるからだ。正に「数は力なり」である。
- 「俺たちはアメリカ人だ。国のために戦いたい」と言ってハワイの二世達の多くが志願兵になり、442部隊が編制された。彼等は欧州戦線の激戦地に送られて壮絶な戦闘を行った。「俺たちは日系人として馬鹿にされているけどアメリカ人だ。今こそアメリカ人としての力を見せる時だ」と懸命に戦った。テキサスの部隊を救出して英雄になったが、211人を助けるために800人が死傷した。彼等は軽快なリズムで「Go for Broke」歌っていた。その歌詞「Fighting for you and the red white and blue, Fighting for dear old Uncle Sam」に出てくる「the red white and blue」はアメリカ国旗、「Uncle Sam」はアメリカ人のことで、「俺たちは今こそアメリカ人であることを見せるのだ」という彼等の心情をよく表している。50年以上前にハワイに初めて行った時、腕をなくした人、片足の人など日系人の傷痍軍人が多かったことを今でも憶えている。
- 日本人一世の心情は次のような言葉で表された。「たとえば養子はまず第一に養家に忠実であるべきで、養家をさしおいて生家に忠実であることは日本の道義に反する。二世の血のつながりをこえてアメリカに忠誠を尽くすのは当然のことである」と、いかにも日本人の考え方であった。終戦になって、戦争から帰って来た息子を抱きしめる父親、戦死した息子の勲章を受け取る父親、これらの写真を見ると本当に涙が止まらない。写真の父親はサトウキビ畑で働きまくったせいで、年齢のわりによぼよぼだ。
- 1952年、ウォルター・マッカーラン移民改正法によってアジア系一世も帰化できることになり、日本人一世も日本人から日系アメリカ人（AJA: Americans of Japanese Ancestry）として米国市民になった。
- 1959年、50番目の州としてハワイ州が誕生した。ハワイは米国本土から離れているため、なかなか州に昇格できなかったが、アラスカ州が承認されたためにハワイだけ据え置かれる理由がなくなった。ハワイ州では共和党知事が過去2回当選しているが、元々労働者だった日系人が強いから基本的に民主党の地盤で、現在の知事は日系人で民主党のイゲ氏（David Ige）。

#### ハワイ・ルネサンスと観光立州ハワイ

- ハワイ王国時代はマーク・トウェインやイザベラ・バードの来訪記録があるが、よほどの大金持ちしか観光に来なかった。アメリカの準州になってからは観光開発に力を入れ始めて、1920年代にアラワイ運河をつくりワイキキを観光地に変えた。ワイキキのワイは水、キキは湧くの意味。水が湧くのでワイキキの名の通り、元々稲作水田だったところを埋め立てて造った。ビーチも人工の砂浜で、最初はモロカイ島の砂を運び入れていたがモロカイ島の人達の反感を買ったためオーストラリアの砂を運んできた。人口ビーチを維持するのは今も大変である。モアナホテル、ロイヤルハワイアンホテルも建設され、観光客向けにハワイらしさを強調するショウ的なフラダンスが始まった。
- プランテーションは国際競争に負けて衰退の一途をたどり、耕地面積がほとんどなくなった。ドールも生産拠点を海外に移して、ハワイで地産地消するものだけが残った。それに代わって急成長してきたのが観光産業で、年間観光客1千万人の目標が2019年に達成された。2019年の観光客1042万人の内訳は米国本土65%、日本15%だった。ハワイの人口が141万人なので、丁度、人口140万人で年間観光客1千万人の沖縄に匹敵する。ハワイと同様に沖縄にも琉球王朝の時代があり、沖縄らしさがあるのが魅力の1つである。
- 経済の中心は地元資本のビッグ・ファイブから世界の大資本に代わっていった。サトウキビ畑やパイナップル畑はゴルフ場が変わった。
- ハワイは基地の島でもある。沖縄やグアムを含むインド太平洋軍の総本部がオアフ島にあって、米国の重要な軍事大拠点になっている。軍事関連の収入は観光関連収入とそれほど変わらず、基地経済がハワ



イの一面になっているため、今回のコロナ禍で観光客が激減したが経済への打撃は半分だけになっている。基地の島という面でも沖縄と似ているが、ハワイの場合は自国の軍隊であり、沖縄とは違う。

- 1960年代から始まった公民権運動からの流れに乗ってハワイルネサンスが起こり、観光客向けのフラダンスやハワイアン音楽の見直しが行われた。その結果、伝統を大切にした芸術性の高いフラやメレが復興した。昔ながらの力強いカヒコフラも新しい自由なアウアナフラも芸術性が突き詰められていった。そんな素晴らしいフラだから日本でもフラを学ぶ者が多いのだ。
- ハワイルネサンスにより 1978年、ハワイ語が英語とともにハワイの公用語となり、義務教育で教えられるようになると、先住ハワイアンだけでなく、ハワイで生まれ育った全ての人種にとってのアイディンティになった。実際、空港ではトイレに英語とハワイ語が併記されているし、アナウンスにもハワイ語が入る。しかし、ハワイ語を日常的に使う人は一人もいないが、片言のハワイ語を外国語のように話すことはできるのだ。
- 白人系、アジア系、ハワイアン、その他に区分けした人種別平均収入を見ると大差ない。白人系、アジア系、ハワイ人系が仲良く、同じような生活レベルで暮らしている。この結果、混血も自然と多くなって、これがまたハワイの良さなのだ。
- ハワイに生まれ育ったハワイアンは、米国人としてのアイディンティとともにハワイアンとしてのアイディンティも大事にする。どの民族出身にかかわらずハワイ語やフラやメレを大事にする。また、自分自身のルーツに関心を持ち感謝する。今では日本人六世が誕生しており、親戚一同集まると大パーティになる。写真にある六世の日本人の血は16分の1だ。
- ハワイの観光地としての魅力は、先ず自然。北東からの貿易風はさわやかで最高だ。50年前にパパイヤ園で働いていた時の休憩中の木陰でのまどろみは至福のひと時であった。それに豊かで美しい自然がいっぱいある。美しいゴルフ場も多い。多民族の色々なものが残っていること、ハワイ王朝以来のハワイ文化があることなども魅力だ。観光客の65%がアメリカ本土から来ており、ワイキキで会う外人は晴れやかな気持ちの観光客ばかりで優しい。ワイキキで働いているハワイの人たちもアロハスピリッツで一生懸命におもてなしをしてくれる。観光客にとってはハワイはパラダイスである。が、住むとなると別だ。米国で最も物価が高く、性犯罪、銃事件も他の州と変わらずおこる。本土から片道切符でやってくるホームレスも多い。
- 今、ハワイはコロナ禍で大変だが、アメリカ本土からの観光客が戻って来ているし、ハワイのワクチン接種率が40%以上になって状況は良くなってきている。このコロナ禍で良かったことは、観光客がいなくなって海がきれいになったこと。ハナウマベイなどは透明度がすごく良くなって大型の魚まで入ってくるようになった。また、失業者に農業支援を行って、荒れ地になったサトウキビ畑でレタスの栽培など地産地消の農業を推進した。これに大勢の若者が参加している。最悪の食糧自給率も少しはあがるであろう。
- コロナ禍が早く終息し、来年には気兼ねなくワイへ行けるようになることを願っている。

ピジン英語(Pidgin English)とQ&Aについては

時間切れのため割愛

### 3. 岐阜県支部 第7回年次大会 安田支部長

- ・ 中部本部 平田本部長と山口事務局長、三重県支部 竹居支部長、静岡県支部 山之上支部長が挨拶。
- ・ 昨年度の事業結果と決算結果および今年度の事業計画と事業予算、幹事選挙結果を報告。
- ・ 岐阜県支部の幹事交代は次の通り。他の幹事は留任。  
退任幹事：豊田 崇文 氏、中島 義雄 氏、中平 真一 氏  
新任幹事：大矢 智一 氏、熊澤 貴弘 氏、坂井 善幸 氏、原 善一郎 氏
- ・ 支部長交代：新支部長に 藤橋 健次 氏
- ・ 前回講演会のアンケート結果
- ・ 今後の講演会計画。7月3日、9月11日、11月6日。9月と11月の会員講演が未定。
- ・ 中部本部の行事：5月29日新合格者説明会、6月5日夏季講演会、7月24日中部本部年次大会
- ・ 岐阜県支部会報について(高木幹事)：次年度も継続することを幹事会で決定。投稿希望者は高木幹事まで

連絡を。8月3日（火）から開始して毎週火曜日に発行。これまでの会報は当会ホームページに掲載。

#### 4. ウェブ懇親会（中止）

#### 5. 次回の講演会

7月3日（土） 場所 岐阜大学サテライトキャンパス（コロナ状況によってはウェブ講演会に変更）

会員講演：原善一郎技術士事務所 原 善一郎 氏（情報工学）

「コンピュータ・ウィルス対策」

来賓講演：岐阜大学 工学部 社会基盤工学科 教授 神谷 浩二 氏

「地下水と湧水」

以上